

## ウェーバー研究は何を求めているか

橋本直人

## 一 問題の所在

これまで、マックス・ウェーバーについては国の内外を問わず、実に膨大な量の研究が蓄積されているし、今日もなお、盛んに研究がなされている。私自身、これからウェーバーを主題として研究生活を始める者として、これまでの研究の蓄積なしでは何ごともできないということを実感している。しかし、ここでは、これから研究を始める者として、今までウェーバー研究という領域では余り明確に意識されなかったであろう問題を取り上げてみたい。すなわち、ウェーバー研究は何に対して何を求めているのか、という問題である。だが、この問いは「ウェーバー研究の意義」といったものを問題としてい

ることである。ここで問うているのは、ウェーバー研究がその対象及び目的について、論理的に考えてどのような態度を取り得るか、という問題である。このことの意味をもう少し明瞭にするために、一つの例を取り上げてみたい。

W・シュルフターは、彼の論文「合理化のパラドックス」の冒頭で、ウェーバー研究を主題とすることの理由を以下のように述べている。

「彼（ウェーバー——引用者）の社会学は、すべての偉大な社会学がそうであるように、『現実自体の明確に表現された問題性』であるし、彼の問題性も、少なくともそれぞれの部分についてみれば、なおわれわれの問題性であり、システム論もネオ・マルクス主義もこれを追い抜いてはいないからである。<sup>(1)</sup>」

ここで「追い抜いてはいない」と評されているのは、

具体的にはパーソンズとマルクーゼであるが、その評価の是非をここで問題にするわけではない。問題としたいのは、「彼の問題性」と「われわれの問題性」の共通性という点である。シュルファターの言葉に従えば、ウェーバー研究が我々にとって何らかの意義を持つのは、ウェーバーと我々が問題を共有しているからに他ならない。そして、現在の我々が抱えている問題を検討する「導きの糸」であるかぎりにおいて、ウェーバーの問題を検討することは我々にとって意義がある、ということになるであろう。逆に、ウェーバーの問題関心と我々の現在の問題関心との共通性が保証されていれば、我々は安心してウェーバーのテクストに沈潜することができる。この前提の上では、ウェーバーのテクストの研究 $\parallel$ ウェーバーの問題の研究 $\parallel$ 我々自身の問題の研究、という等式が成り立っているのであり、その結果、我々はウェーバーのテクストの研究をしながら我々自身が抱えている現在の切実な問題にも対応していることになるからである。

このような状況であれば、「ウェーバー研究は何を求めらるか」などと問う必要はないだろう。ウェーバー研究は、ウェーバーのテクストの正しい解釈を追求することによってウェーバーという偉大な社会学者の思想を明らかにする営みであり、同時にその結果として我々自身の

問題にも思想的に対応する営みである。ウェーバー研究は、ウェーバーのテクストの妥当な解釈を目指すことで、彼の思想を通じて現実の諸問題に対してアクチュアリティを保ち続けることになる。しかし、このようなことが可能となるのは、上で述べた等式が成立する限りのことである。そうすると、このような疑問が生ずるのである。もし、この等式が成り立たなかったとしたら、ウェーバー研究は一体どのような態度を取り得るだろうか、と。これが冒頭で立てた問題の意味である。

## 二 「伝記的」研究

もちろん、ここで我々の問題関心とウェーバーの問題関心とがまったく重なり合わない、などと主張するつもりは毛頭ない。「それぞれの部分についてみれば」、ウェーバーが抱えた問題の背景には、我々が生きている現在の状況と重なっている面も当然存在しよう。しかしながら、ウェーバーの問題関心と我々の問題関心とが共通性を持っているか否か、またあるとしたらどの程度か、といったことは、ウェーバーに関する研究によって検討の対象とされ得る問題でこそあれ、ウェーバー研究の出発点として論証抜きで要求できるようなものではなからう。例えば、W・ヘニスが『マックス・ウェーバーの問

『題設定』で現在のウェーバー研究の主流を批判するとき、問題とされているのは、まさに現在のウェーバー研究が主題としている問題関心がウェーバー自身の問題関心とは異なるのではないか、という点であったといえよう。

ヘニスは、「ウェーバーの『中心的』関心は『人間存在』の発展にある」として、ウェーバー研究の主潮流である合理化論的解釈を次のように批判する。

「一般に彼の包括的な研究関心と想定されるもの——テンブルックの定式化では『合理性とは何か』、また通常の定式化では『西洋合理主義』の発展——は、せいぜい作品解釈の一産物に過ぎず、大抵は作品に持ち込まれた仮説である。<sup>(2)</sup>」

合理化論的解釈に対するこのような批判が示すように、ヘニスのウェーバー研究は、およそ対極的な姿勢での解釈を試みる。すなわち、「ウェーバーを新鮮かつ『因われない目で』読むこと、それも全体としてのウェーバーを<sup>(3)</sup>、という姿勢である。前節の議論に照らして見ると、このような態度をとったウェーバーのテキスト解釈が目的とするのは、第一義的にはウェーバー自身の問題関心を明らかにすることであり、ウェーバーという対象を知ることが研究の課題である、と考えられよう。

その場合、ウェーバーの問題関心と我々の問題関心と

が共通であるとは限らないのであるから、我々自身の抱えている問題関心や現在の課題は、とりえず二次的な問題とならざるを得ない。もちろん、先にも述べたように、研究対象としてのウェーバーを知ることが我々にとって重要な意味を持たない、などと断言することはできない。しかし、ウェーバーを知ることが現在の我々の問題関心に対して寄与し得る、ということこそ研究に先立って所与のごとく受け入れることも論理的には許されないだろう。ヘニスは「ウェーバーとの取り組みは、どのようなものでもすべて今日の問題状況と結びつかざるを得ない<sup>(4)</sup>」と言うが、それはあくまで研究の末に得られる可能性の一つにすぎない。むしろ、このような研究方法は、その研究が「全体としてのウェーバー」へと深められてゆけばゆくほど、ウェーバーの問題関心と我々の問題関心との相違が明瞭になってくるのではないだろうか。例えば、ウェーバーは近代ヨーロッパに「普遍的な意義」と妥当性を持つ発展傾向を取る——と少なくとも我々は考えたい——文化諸現象<sup>(5)</sup>の成立を見た。テキストを言葉通りに受け取るならば、これはウェーバーの（少なくとも宗教社会学の）議論の出発点と考えられる。しかし、それに対して「我々は今でもそう思ったがるかどうか<sup>(6)</sup>」と、冷ややかに距離を取ったのは他ならぬヘニス

である。このような距離が生ずる限り、現在の我々が抱えている問題関心に対してウェーバー自身の問題関心を研究し、明らかにすることがどのような関係を取り得るのか、確定的なことを研究に先立って明言することは不可能である。

そうであれば、このような研究態度が目指すものは、テキスト解釈を通じてウェーバーという一人の具体的な人物が考えたことを明らかにすること、「人間ウェーバー」について「囚われない目で」理解することであろう。この場合、ウェーバーという「人物」が我々にとって何を意味するかは、とりあえず括弧に括らざるを得ない。その意味で、この研究態度はウェーバーについての歴史叙述的研究、さらにいえば「伝記的」研究と呼ぶことができる。この、ウェーバー研究の「伝記的」方向の極点を明瞭に示していると思われる言葉を以下に引用しておく。このように突き詰めた研究態度であれば、それは論理的に一貫した選択肢の一つであり得よう。

「私にとっての問題は徹頭徹尾ウェーバー的『人間』と『ウェーバーの問題状況』であって、ウェーバーの現代的意味如何ということは私にとっていわば二次的な問題であった。ウェーバーの現代的意味がたとえゼロであっても、私はウェーバーを研究する。」<sup>(7)</sup>

この研究態度を冒頭の議論に照らして位置付けてみれば、次のように考えられる。ウェーバーの問題関心Ⅱ我々の問題関心、という等式が成り立たない場合、ウェーバー研究は、ウェーバーのテキスト解釈Ⅱウェーバーの問題関心の研究、および、ウェーバーのテキスト解釈Ⅱ我々の問題関心への対応、という二つに分裂した等式に直面していることになる。そして、ウェーバーの「伝記的」研究は明確に前者を選択した、と見ることができ。しかし、この場合、我々の問題関心への対応は「二次的な問題」として扱われなければならない。

### 三 作品史研究

さて、「伝記的」研究の場合、ウェーバーのテキスト解釈がウェーバーという人物を知る条件であった。これと対応して、ウェーバーという人物についての理解を元にウェーバーのテキスト解釈を行なう、という研究態度もあり得るだろう。いわゆる「作品史」研究である。

近年、ウェーバー研究の領域で幅広い議論を巻き起こした「作品史」研究というアプローチは、膨大な断片として残されたウェーバーの諸著作を、その前後関係や成立の状況などを明らかにすることによって全体における位置付けを確定し、もってテキスト解釈の基礎とする、

という研究方法である。このアプローチをウェーバー研究に導入したのはF・H・テンブルックであるが、彼が作品史研究を基礎にそれまでのウェーバー研究の態度やテキスト編纂を批判した<sup>(8)</sup>ことから、ウェーバー研究に一大センセーションを巻き起こした。例えば、テンブルックはそれまでウェーバー晩年の主著の一つとみなされていた『経済と社会』のテキスト編纂を批判し、さらには「経済と社会」としてまとめられたウェーバーの遺稿を、いわば「頼まれ仕事」であるとして主著という位置付けを退けたのである。

これに対して、上述のシュルフターや折原浩らが作品史研究にのっとって反論を展開しているが、ここではその議論の内容について論ずることはできない。ここで問題としたいのは、作品史研究とウェーバーの問題関心との関係である。

上述のように、作品史研究は、ウェーバーがいかなる状況の下で、何のために、どのようにそのテキストを書いていたか、ということ明らかにし、それをもとにウェーバーのテキスト研究を行なう、という手法である。いかえれば、ウェーバーの動機ないし意図を知ることによって、ウェーバーにとってそれぞれの著作がどのような意味を持っていたか、という観点から彼のテキスト

を解釈するということであろう。テンブルックの場合であれば、『経済と社会』には統一的なテーマや観点が認められない、としてこれを主著と見る既存の研究を批判するのである。その結果、『経済と社会』としてまとめられた遺稿は、どれ程我々にとって興味深いものであっても利用されないことになる。実際、テンブルックは彼の合理化論的解釈を、もっぱら『宗教社会学論集』所収の『世界宗教の経済倫理』にのっとって構成している。ここでテンブルックの主張のポイントとなっているのは、ウェーバーが『経済と社会』について一貫した動機や意図を持っていたとは考えられない、という判断である。

もっとも、テンブルックの場合、ウェーバーのテキストからウェーバーの動機ないし意図を論証し、ついでウェーバーの動機ないし意図からウェーバーのテキストを解釈する、という形になっており、やや循環論法のような印象を受ける。その点では、テンブルックに対して同じ作品史研究の方法で反論を行なったシュルフターのほうがむしろ論理的には一貫していると言えよう。彼はウェーバーが編者をつとめた『社会経済学綱要』のレイアウトの記録やウェーバーと出版社との間の書簡を検討するなどして、テンブルックの主張を批判的に検証している<sup>(9)</sup>。

恐らく、この手法を元にしてウェーバーのテキストを解釈するという態度も、論理的に一貫した選択肢の一つとして成り立ち得るだろう。それは、先に述べた「伝記的」研究態度のいわば裏返しである。「伝記的」研究がウェーバーのテキストからウェーバーという人物を知ろうとするのに対して、作品史研究はウェーバーという人物の意図からウェーバーのテキストの解釈を行なおうとする方法とすることができる。従って、「伝記的」研究がウェーバーという人物の理解を第一義的に追求するのに対して、作品史研究はあくまでウェーバーのテキストの解釈を第一義的に追求する。

だが、作品史研究の場合も、「伝記的」研究と同様に、ウェーバーの意図や問題関心とウェーバーのテキストの対応関係、という地平の上での研究であることに変わりはない。作品史研究のテキスト解釈はウェーバーの動機や意図によって規定されている。すなわち、作品史研究においては、ウェーバーのテキストの意味はウェーバーにとつてのテキストの意味とならざるを得ない。そして、ウェーバーの問題関心と我々の問題関心との共通性が保証されない限り、作品史研究に基づくウェーバーのテキスト解釈が我々にとつて意味を持つかどうかも保証の限りではないのである。例えば、「支配の社会学」をはじめ

めとする『経済と社会』所収の諸論考は我々の問題関心からすれば極めて興味深いのであるが、テンブルックがそれらの重要性に疑問を提示できたのは、彼がウェーバーの意図という観点からテキストを問題にしたという理由によつてである。もちろん、本当に『経済と社会』の諸論考が重要でないかどうかは、なお作品史研究の舞台上で議論されている。しかし、少なくともウェーバーの意図という観点からテキストを検討する限り、我々にとつてのテキストの意味とは異なった解釈が成り立つ可能性は常に存在する。つまり、作品史研究においても、テキスト解釈に際して第一義的に重要なのは我々の問題関心ではなくウェーバー自身の問題関心であり、我々の問題関心は二次的な位置を取らざるを得ないことになる。その意味で、作品史研究も、ウェーバー研究の態度に関する二つの等式のうち、ウェーバーのテキスト解釈Ⅱウェーバーの問題関心の研究、という等式を選択したということが出来るだろう。

そこで、「伝記的」研究と作品史研究に共通する研究態度の特徴を、著者指向的研究態度と呼ぶことにしよう。この研究態度においては、ウェーバーのテキスト解釈に際して第一義的に重要なのは著者ウェーバーの動機、意図、あるいは問題関心である。この研究態度は、確かに

論理的に一貫した態度であり得るし、その点では研究態度の選択として十分納得のいくものである。しかし、その場合には、我々の問題関心や現実の問題状況などはひとまず脇に置かれることになる。従って、我々にとっての意味を出発点としたウェーバー研究を指そうとするならば、著者指向的態度を取らずにウェーバー研究を行なわなければならない。先に述べた等式に照らしてみれば、ウェーバーのテキスト解釈<sup>II</sup>我々の問題関心の研究、という等式の選択である。だが、その場合には、そのようなウェーバー研究が果たして著者指向的態度のように論理的に一貫した営みであり得るだろうか、という問題が生ずる。

#### 四 「再構成」的研究

ヘニスは、「これほど長期にわたって作品の解体や断片化が進み、聖典と目される若干の教材や傑作だけに作品を還元しようとしてきた」<sup>III</sup>と、現在のウェーバー研究の主流を批判するが、これに対してシュルプターは以下のように反発を示している。

「なに故そもそも一人の学者の研究が全体という観点から、そしてその場合さらに一つの主導的な問題提起から理解されねばならないのか？」<sup>III</sup>」

この反発は、これまで述べてきた著者指向的研究態度に対する反発であり、さらには著者指向的態度が我々の問題関心を二次的なものとして扱ふことへの反発であろう。いいかえれば、シュルプターはウェーバーのテキストを解釈するにあたって我々の問題関心に主導的地位を与える権利を主張しているのである。

この権利の主張は、前節の末尾で論じたように、それ自身としては当然あり得る主張であろう。著者指向的態度が一つの選択に留まる限り、その態度を選ばない、という選択も考えられるからである。しかし、シュルプターによる権利の主張は、さらに我々の問題関心のためにウェーバーのテキストを「利用」する権利にまで拡張される可能性を含む。「全体という観点から」ウェーバーのテキストを理解する必要があるのであれば、ウェーバーのテキストの理解は、第一義的には我々の観点、我々の問題関心によって規定されることになるだろう。実際、シュルプターはウェーバーのテキストの「再構成」を試みる場合、その典拠をウェーバーではなく他の理論に求めることに躊躇しない。『西洋合理主義の発展』では、発達心理学から機能—構造理論に至るまでの諸理論を足場としてウェーバーのテキストの「再構成」を試み<sup>III</sup>、また「初期キリスト教」論文では、パーソンス的図式化

の手を借りてウェーバーの「カリスマ」概念を修正し、安定的なカリスマという余地を確保することにつとめている<sup>13)</sup>。

しかし、このようなシュルプターの研究態度を「解体や断片化」とする批判が必ずしも的を射ているとはいえない。シュルプターはそのような態度を選択したのであり、その選択肢自身を否定することはできないからである。そうだとすると、シュルプターのウェーバー解釈に対しては、上述のヘニスによる批判よりも、「ウェーバーの歴史叙述は正しい、とパーソンズが素直に信じていたような時代は終わってしまった」<sup>14)</sup>というG・ロートの溜め息のほうが相応しいのではないだろうか。シュルプターが現在の我々の問題関心から出発してウェーバーのテクストを解釈しようとした結果として「解体や断片化」へと至るのであれば、それは、我々にとって問題となる事実について、ウェーバーのテクストが全体として完全に対応するなどとは言えない、という状況をあらわしたものであろう。つまり、ウェーバーの叙述すべてが事実の妥当な記述であるとは限らない、ということを含意していると考えられるのである。

このような理解が妥当であるとすると、シュルプターの研究態度に対して「ウェーバーの正しい理解ではない」

と批判することに意味があるとは言えない。この研究態度にとって、「ウェーバーの唯一正しい理解」といった類いのものは必ずしも積極的な意味を持たないからである。この研究において目標とされるのは、我々の問題関心に則したウェーバー解釈であり、著者ウェーバーの意を受けた唯一正当なる理解ではないのである。

しかし、シュルプターの研究態度に対して、「ウェーバーの正しい解釈ではない」という批判は無意味であっても、シュルプターの研究が、そもそもウェーバー研究の形を取る必然性があるのか、と問うことには意味がある。シュルプターが我々の問題関心に則して事実に対応した記述を求めるのであれば、何もウェーバーに依頼する必要はない。この研究態度にとって、ウェーバー研究は、偶然ウェーバーのテクストが記述として「利用」可能であるから行なう、というだけのことである。シュルプターは「彼(ウェーバー——引用者)の問題設定は受け容れられるけれども、彼の問題解決が全面的に受容されるわけではない」<sup>15)</sup>という。しかし、そのときの「ウェーバーの問題設定」なるものが本当に著者ウェーバーの問題関心に対応するものかどうか、という点について議論のあることは上述した通りである。この点が保証されない限り、シュルプターが「ウェーバーの問題設

定」と呼ぶものは、とりあえずシュルフター自身の問題設定という資格において考えられねばならない。

従って、この態度を貫徹するならば、恐らくハーバーマスのように、ウエーバーを素材の一つとする理論的研究、という形に行き着くだろう。そして、著者指向的研究と同様、このような研究態度も論理的に一貫した選択肢の一つではあり得る。しかし、それはもはや「ウエーバー研究」ではなからう。我々自身の問題関心を第一義的なものとしたことと対応して、ウエーバーのテクストが二次的な位置を取るに至ったのである。

## 五 結論 — 新たな態度へ

以上の検討から、我々の問題関心から距離を取るウエーバー研究と、我々の問題関心に則した脱ウエーバー研究、という両極が確定できることになる。しかし、正直なところ、これからウエーバー研究を志す者にとってこの両極のあいだの選択は余り魅力的なものではない。また、この両極の「あいだを取る」ような態度が何ら解決にならないことはいうまでもない。かといって、再びウエーバーの問題関心と我々の問題関心との共通性を所与とする態度に復帰することも不可能であろう。そうすると、我々はこれらの外に選択肢を見出さなければなら

ない。そのために、もう一度出発点に戻らう。

出発点は、ウエーバーの問題関心Ⅱ我々の問題関心、の等式が成り立つとは限らない、という判断であった。この判断がウエーバー研究のアクチュアリティに疑問を提示することになり、ウエーバー研究からこのような両極的態度を抽出するに至ったのである。このことは、ウエーバー研究はそのアクチュアリティの根拠をもっぱら人物としての著者ウエーバーに求めていた、ということを示している。つまり、ウエーバーに関する研究が現状や歴史的事実の分析としての意義を主張したり、我々の問題関心に指針を与えようとする場合、著者ウエーバーの「偉大さ」がその担保になっていた、ということである。そして、著者ウエーバーがアクチュアリティの根拠として疑問視されるや、ウエーバー研究は著者とアクチュアリティとの間である両極的態度を生ずることになる。実際、直接に接した人々ならばいざ知らず、現在の我々の問題関心に対して、ウエーバーという人物の「偉大さ」を暗黙のうちにも前提するような議論がそれだけで説得的であり得る、と考えるのは希望的観測というものである。その意味で、著者ウエーバーがアクチュアリティの根拠として疑問視されるのは当然ともいえる。

しかし、それにもかかわらず、ウエーバーの書き残し

たテキストが今まで読まれ続けてきたことは間違いない。なぜ読まれ続けてきたのか、その理由が著者ウェーバーの「偉大さ」なのか、何か他の理由によるのか、といったことをここで論ずることはできないが、ウェーバーのテキストが読まれ続けてきた、ということとは事実である。そして、このことから、現在の我々が社会や歴史について何らかの認識を得ようとする場合、その認識の枠組自体がウェーバーのテキストによってある程度規定されている、ということがいえるだろう。現在の我々の問題関心にウェーバーが最も重要な形で関わるのは、まさにこの点においてである。ウェーバーのアクチュアリティ如何ではなく、我々にとつてのアクチュアリティの在り方が他ならぬウェーバーのテキストによってある程度規定されているということ——現在の我々とウェーバーとの関係を考えるのであれば、この点に注目するという選択もあり得るのではなからうか。

そして、この点から出発するならば、あの両極とは異なった態度をもってウェーバー研究に臨むことが可能となる。そのような研究態度が目指すのは、ウェーバーのテキストを分析することで我々の社会認識を検討することであり、さらには、テキストに即したウェーバーの読み替えによって我々の認識枠組を組み替える可能性を

提示することとなるはずである。

## 追記

筆者は、一九九二年度若手ゼミナールにおいて、「ウェーバーの合理化論と近代社会像」と題して、ウェーバー合理化論について内容上の検討を報告した。しかし、その議論のための方法的前提について明確にすることの必要性を感じたため、本論文ではウェーバー研究の態度を論ずることとした。筆者の個人研究発表に参加してくださった諸氏にはご了承願いたい。

また、本論文でいくつかのウェーバー研究が取り上げられているが、本論文はこれら諸研究の公正な評価を目指したものではない<sup>100</sup>。本論文の目標は、諸研究態度を図式的に整理し、以て筆者自身の態度決定をすることである。そのため、本論文での諸研究の位置付けは、あくまで一面的なものでしかない。

## 註

(1) Schluchter, W., *Rationalismus der Weltbeherr-*

*schung*. Frankfurt a. M., 1980, S. 9f. 米沢和彦・嘉目克彦訳『現世支配の合理主義』、未来社、一九八四、

- (2) Hennis, W., *Max Webers Fragestellung*. Tübingen, 1987, S. 25. 嘉目・他訳『マックス・ウェーバーの問題設定』、恒星社厚生閣、一九九一、二四頁
- (3) Ibid. S. 5. 邦訳五頁
- (4) Ibid. S. 4. 邦訳四頁
- (5) Weber, M., *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I* [Tübingen, 1920, S. 1. 大塚久雄・生松敏三訳『宗教社会学論選』、みすず書房、一九七二、五頁
- (6) Hennis, a. a. O. S. 29. 邦訳一九頁
- (7) 安藤英治『ウェーバー歴史社会学の成立』、未来社、一九九二、二九頁。ウェーバーについて精神分析的研究を試みたシムマン『鉄の檻』の訳者が安藤であることを見て、彼が一貫して「伝記的」研究態度を取り続けていることがうかがえる。
- (8) Tenbruck, F. H., "Das Werk Max Webers." in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* (KZfSS) 27, 1975, ders., "Abschied von Wirtschaft und Gesellschaft." in: *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft* 133, 1977
- (9) Schluchter, "»Wirtschaft und Gesellschaft«: Das Ende eines Mythos." in: *Religion und Lebensführung*, Frankfurt a. M., 1988 井上琢也訳「経済と社会——神話の終焉——」、河上倫逸編『ウェーバーの再検討』、風行社、一九九〇、所収
- (10) Hennis, a. a. O., S. 5. 邦訳五頁
- (11) Schluchter, "Die Religionssoziologie: Eine werkgeschichtliche Rekonstruktion." in: *Religion und Lebensführung*. 佐野誠訳「宗教社会学——作品史の再構成——」、『再検討』所収
- (12) Schluchter, *Die Entwicklung des okzidentalen Rationalismus*. Tübingen, 1979 嘉目克彦訳『近代合理主義の成立』、未来社、一九八七
- (13) Schluchter, "Ursprünge des Rationalismus der Weltbeherrschung: Das antike Christentum." in: *Religion und Lebensführung*. なお、シユルフターに対するバインソンの影響、という関連は、東京外国語大学の山之内靖教授にご教示いただいた。この場を借りてお礼を申し上げます。
- (14) Breuer, S., *Max Webers Herrschaftssoziologie* に対して G.Roth の書評。KZfSS, Bd.44. 1992, S.150.
- (15) Schluchter, *Rationalismus der Weltbeherrschung*, S. 7. 邦訳一頁
- (16) 最近の諸研究の公正な評価としては、嘉目克彦

「『再構成』の陥穽」、『社会学史研究』第十号、一九八八、などを参照されたい。本論文も、この嘉目論文に多く負っている。

(はしもと なおと 一橋大学)